様式３　【物・文化財・風景など実体のあるもの】

ふくしまの森林文化調査カード

県 HP公開（ 可・否 ）

区分	1.森づくり　2.森の恵み　(3.森と技) 4.森と暮らし　5.森の文化財　6.森の風景	
分野（ふりがな）	（分野） 漆掻き	（ふりがな） うるしかき
地域独特の呼び方		
タイトル	漆掻き	
伝承地域	会津地方	
由来（年代）	（いつ、どこで、誰によって起こり、どのようにして現在まで（いつまで）伝えられてきたか） 会津の漆工芸は、天正 18 年(1590 年)会津領主なった蒲生氏郷が奨励保護したことから始まり、漆工芸が盛んになるとともに漆の生産も盛んになった。	
内容	（内容と共に、行事・祭りの場合は実施の時期、郷土料理の場合レシピなども） 漆掻きの手順としては、大きく四つの手順がある。 (1)山入り　6 月初旬、漆掻きは山入りという作業から始まる。ウルシの木の周りの雑草を取り足場を確保するなど、ウルシの木の風通しを良くする。 (2)目立て　6 月中旬、漆を採る基準となる最初のキズを付ける。カマで木の表面を平らに削り、カンナでキズを付ける。木の根元から 20cm ほどに 1～2cm の溝をつけ、これを基準に上方に 30～40cm の間隔で溝をつける。 (3)辺掻き　目立てのキズの上に漆掻きの溝を徐々に伸ばしながらつける。カンナで削った溝にメサシの刃でキズを入れにじみ出た樹液をヘラで掻取り、タカッポという容器に入れる。 6～7 月中旬までを「初辺(ハツヘン)」、7～9 月初旬までを「盛辺(サカリヘン)」、それ以降を「遅辺(オソヘン)」と呼び、それぞれ漆の性質が異なる。 (4)伐採　辺掻きが終わって 10 月になると漆の出も悪くなり樹液の流れを完全に遮断する止掻きをし、冬に伐採する。伐採された根株からは萌芽更新により新しいウルシが芽生える。	
大きさ・材質	（大きさ：緑の文化財、巨木、建造物などスケールが情報として有用なもの。	（材質）
文化財等の指定状況		
問い合わせ先	電話	

キーワード

伐採したウルシの木の根から芽が出て、10～15 年後には漆が採れるようになる。
「初辺」から「遅辺」まで、1 本のウルシからは、約 200g の漆液が採取できる。
採取の時期と漆の性質

「初辺」: 乾き(硬化)が早く、水分が多い。塗ったとき乾きが早いため表面に縮み(シワが寄る)が生じやすい

「盛辺」:「盛り漆」と呼ばれ、山吹色で艶が良く、粘りなど他の時期のものと比べ品質が最も良い。

「遅辺」:「盛り漆」より白っぽく、塗ったとき艶が落ち、粘りが強くなる。全体に品質は落ちるが、塗膜が厚くなるという長所がある。

【フリーフォーマット】※表面に記載した内容に関連したことを自由に記入してください。

活動の様子が分かる資料等があればコピーをご恵与ください。